

## 「フリースクールの現場における不登校への支援について」

発表者：NPO法人school 内海博文

### 1. NPO法人school 概要

2019年設立。主な事業：フリースクールの運営。そのほか、保護者からの相談や親の会・勉強会等の定期開催。2021年度（令和3年度）に大村市教育委員会から、大村市で最初の「出席扱い」可能な民間施設として承認。

### 2. 設立背景

学校に行けない子どもたちが家以外で安心して過ごす場所が地域に少ないこと。また保護者が一人で悩みを抱え、相談できる場所が少ないこと。

#### 運営詳細（場所・時間・料金等）



「おおむら学習センター」の施設を共同で使わせてもらって

学校に行けない小中学生に居場所と学習機会を提供



所属児童生徒数の変化（各年度延べ人数）

2019年：4名  
2020年：0名  
2021年：12名（「出席扱い」可能に）  
2022年：14名  
2023年：10名（23年10月現在）

火～金 10:30～15:00 料金 17,000円（月額）

週の時間割

		火	水	木	金
午前	A	美術工芸	料理	ヨガ	書道
	B	中3数学	個別指導	自由時間	PC
	C	PC	自由時間		中3国語
午後	A	みんなで考える時間	中1・2頭の体操	中1・2英語	音to表現
	B	中3英語	中3社会	中3理科	中1・2数学
	C	自学		自由時間	自由時間

#### スクートでの過ごし方（例）

10:15 登校  
10:30 プロジェクト授業・自分時間・勉強  
12:10 昼食・お昼休み  
13:00 自分時間・勉強・プロジェクト授業  
14:40 掃除  
15:00 下校

高校生と一緒に  
プロの先生から学ぶ



方針：子どもにとってここが安心して自分でいられる場所に！

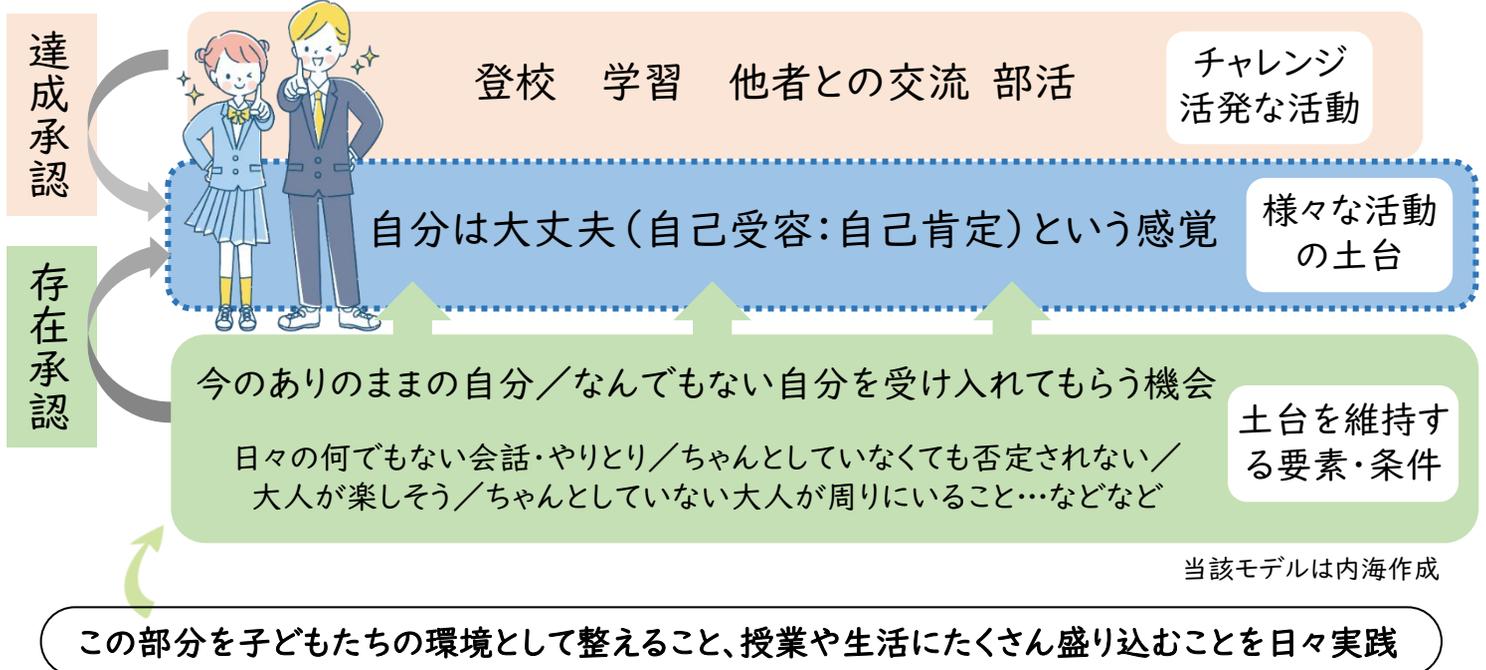
「不登校支援」ではなく、その子が元気を取り戻すことを第一の目的とする。

→スタッフと子ども、子どもと子どもの関係づくり（信頼関係構築）を最も大切にしている

理由：学校に行けない自分のことを「ダメなやつ」だと考え、とても落ち込んでいる。

（こうした精神状態にある子どもは、他者との関係づくりや、登校・学習に気持ちが向かうことはない。）

## 子どもと関わる際の心理・関係モデル



### 3. 不登校状態にある子どもたち／保護者の実態について

#### 家にいるときにどういう気持ちで過ごしていたか

スクートで毎年実施している不登校経験者座談会で実際に子どもたちから出た内容

ずっと寝ていた。行きたいなという気持ちはあった。けど、それより行きたくないって気持ちの方が強かった。

疲れていてすごい眠たかった。夜眠れてない。学校に対して恐怖心というかストレスみたいなのが強すぎた。夜遅くに寝て、朝早くに起きてしまうの繰り返し。夜寝る前に恐怖心か何かで全然眠れない。でも、朝ははやく起きないと、みたいな恐怖心であまりしっかり眠れてなくて。

一日の半分くらい寝てました。夜12時に寝て、昼12時に起きる、みたいな。そんな生活で。気持ちは、やっぱり、勉強が周りに遅れるし、友達でも「待ってるよ」ってラインしてくれる人もいて、「いかんばな」っていう気持ちもあるし、でも、やっぱり、1回休んでしまって・・・行ったら、また勉強きついから、行きたくないなって気持ちもありました。

自分を責めてばかりいた。不登校になったこともないし、不登校のひとの話も聞いたことがなかったんで、なんで自分がそうなんだろうと考えていた。夜眠りにつく前に考えて泣くこともあった。

夜考えすぎて眠れなかった。友人から来たら?というLINEがきていたこともあり、初めのころは気にかけてくれているんだなと感じていたが、答えられない自分にどうしよう、、、となっていた。昼夜逆転して、深夜2~3時に寝て12時間後の昼の2~3時に起きるという生活。学校に行くところを、その分寝てしまい、次の日はいけないことに。部活に行くと、寝る時間が遅くなる。

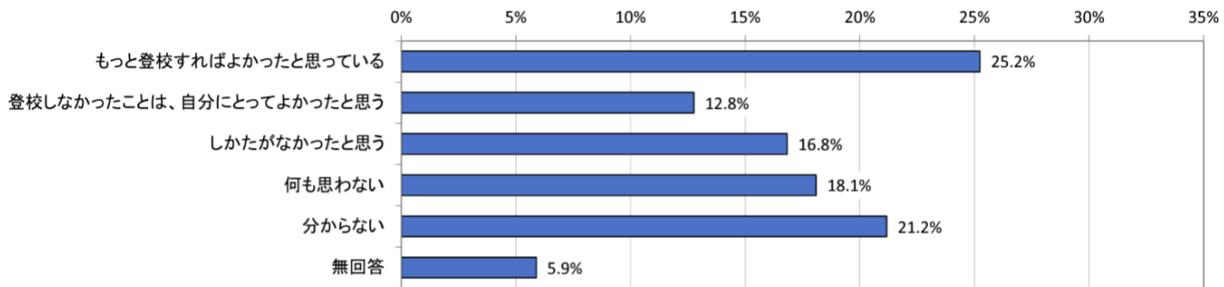
最初の頃は、両親の理解もなく、ずっと部屋で泣いていた。

子どもたちは学校に行けない自分を否定し、自分のことを責めている

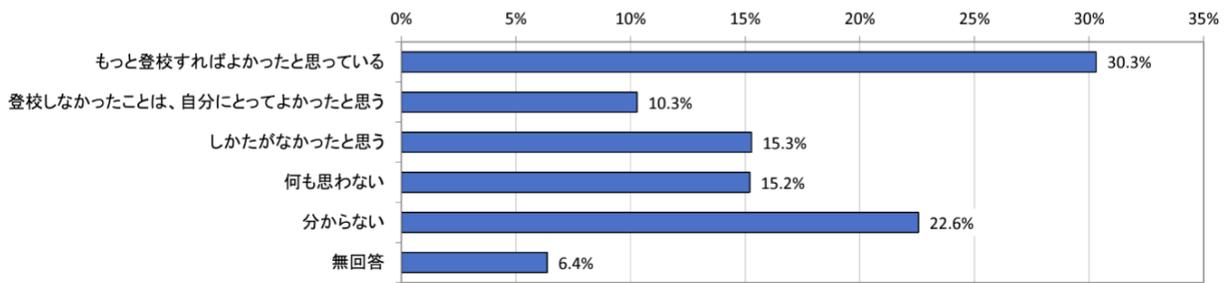
## 学校を多く休んだことに対する感想

グラフ：文科省「令和2年度不登校児童生徒の実態調査」より

### 【小学校】



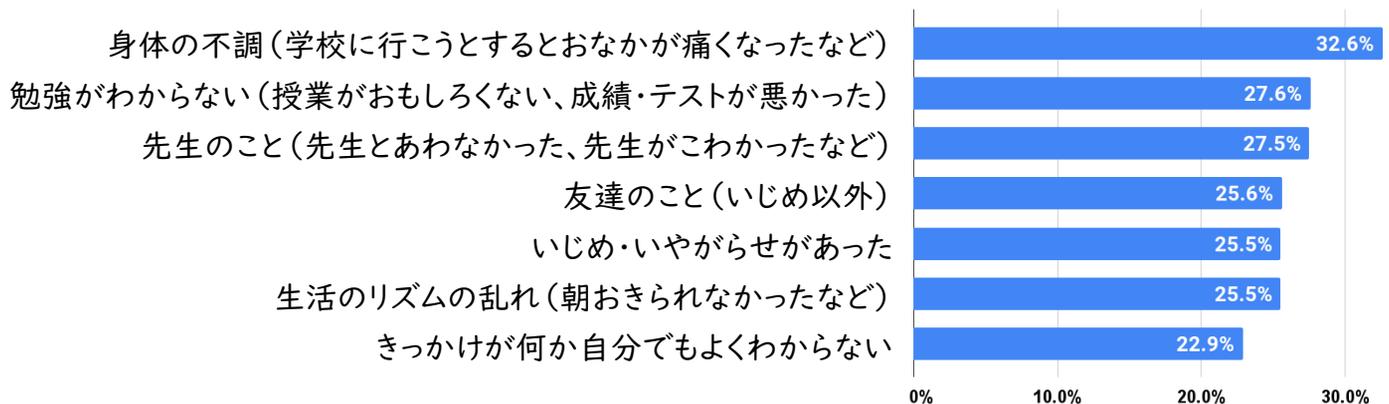
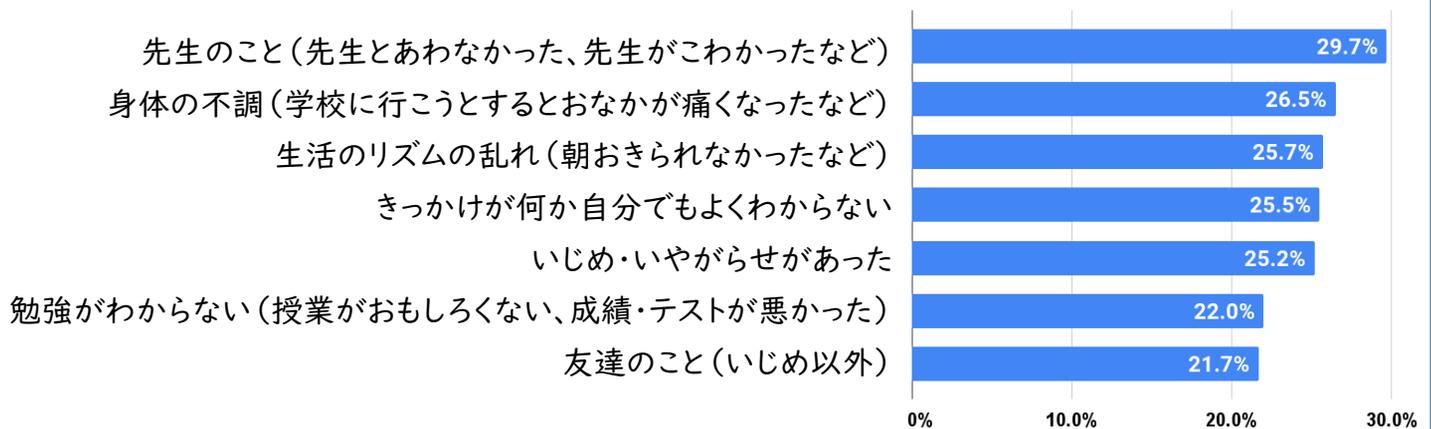
### 【中学校】



学校にいけないことへの後悔、諦め（積極的に休んでいるわけではない）

## 不登校の要因：最初に学校に行きづらくなったきっかけ（上：小学生、下：中学生）

グラフ：文科省「令和2年度不登校児童生徒の実態調査」より内海作成



不登校の要因は様々だが、学校内に起因するものもかなりの程度存在する

- ・不登校になった当初、どこに相談すればいいのかわからない。
- ・自分(母親)は受け入れているが、夫や親族、知人などから理解してもらえない。「甘えさせるな」「お前の育て方が悪かった」「無理やりにも行かせろ」と自分が責められる。
- ・子どもから笑顔が消える。感情がなくなる。
- ・本人の気持ちが不安定で、周りの家族に当たったり、攻撃的になる。
- ・どう言葉をかければいいのかわからない。
- ・自分(親)の気持ちも不安定で、どうしたらいいか。
- ・登校してほしい気持ちがつい表情などに出てしまう。
- ・このままで将来、この子は自立できるのか・・・

多くの場合、保護者は、どこに相談したらいいかわからず、子どもへの接し方も、わからず、不出来な親だと自分自身を責め、孤独に悩んでいる

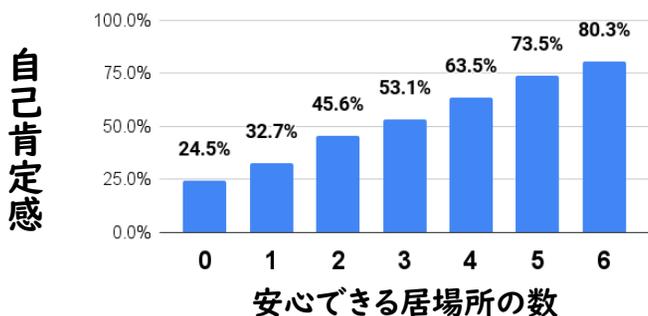
実態：子どもも保護者も自分を責めて、孤独に悩んでいる

#### 4. 学校に戻れない子に、安心できる場所を提供することの重要性

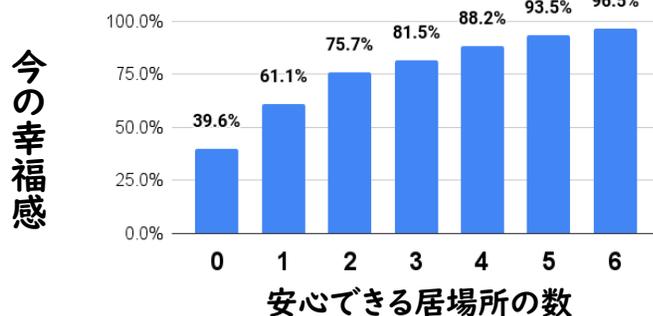
##### 安心できる場所(居場所)と自己肯定感等との関係

内閣府：こども・若者の意識と生活に関する調査 (R4) より

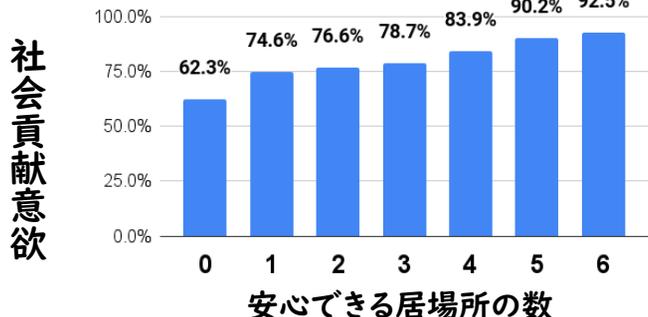
自己肯定感(今の自分が好き)



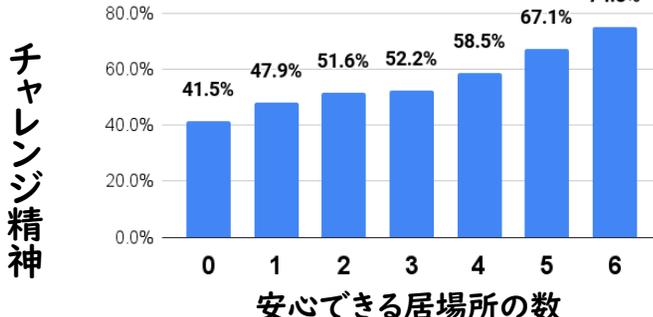
今の幸福感(今、自分が幸せ)



社会貢献意欲(社会のために役立つことをしたい)



チャレンジ精神(うまくいかかわからないことにも意欲的に取り組む)



\*居場所の種類: 自分の部屋・家族・学校・職場・地域・インターネット空間

<https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/ishiki/r04/pdf-index.html>

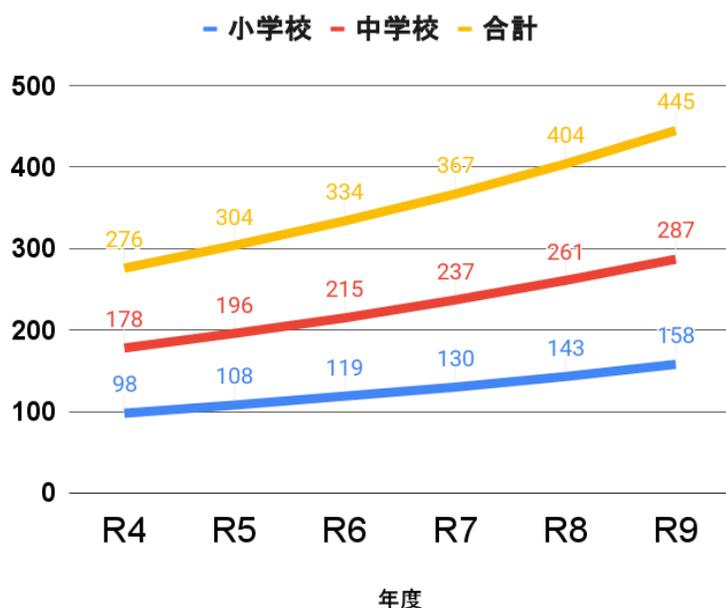
人は「安心できる場所」があるから自分を受け入れ、チャレンジし、社会のために行動する。建設的な人生を選んでいくことができる。

これらのことから、不登校状態にある子どもたちは、建設的な人生を送っていくための土台となる条件をうしなっている可能性が高い。

「学びたい時に学べる」環境の整備が必要である一方、安心できる居場所につながる機会や、そこで過ごす時間を子どもたちに保障することは、より早急に広く進める必要がある。

## 5. 今後の大村市における不登校児童生徒数について(試算)

年10%不登校児童生徒が増えたと仮定した試算(5年後)



5年後の大村市の  
不登校児童生徒数  
小学生158人  
中学生287人  
合計:445人

\*年平均10%の増加率とした根拠

直近15年の大村市における最小不登校児童生徒数の年度と昨年度までの平均増加率

中学生:平成25年 69人→令和4年 178人 (年平均増加率10.8%)

小学生:平成26年 16人→令和4年 93人 (年平均増加率20.8%)

どうすれば、この状況を避けることができるのか。

あるいは、不登校の増加それ自体は避けられなくても、子どもたちが建設的な人生を送るための条件までも失わずに済むのか。

皆さん、一緒に考えてください。よろしくお願いします。

(もし仮に何もしないなら、それは、とても不利な状況にある子どもと家庭を、ただそのまま放置する、そういう選択をしているということになってしまう…)